

## 付篇2

## 吉田遺跡古代理没谷出土の木製品(Ⅰ)

横山 成己

## 1. はじめに(図75・76)

発掘調査開始期の吉田遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として著名であったが、吉田構内南東部においては、総合研究棟新営に伴う発掘調査(田畑2017)が実施された平成12年度以降、主として共同獣医学部(平成24年4月新設、旧名称は農学部連合獣医学科)の施設拡充を目的とした工事計画が頻出し、発掘調査が繰り返し実施されたことにより、官衙遺跡としても著名となりつつある。調査成果を見ると、いずれの調査区においても南東の山地を起源とし、北西に走る谷筋を検出しており、谷右岸傾斜地には大型掘立柱建物跡や総柱建物跡、柵列など古代官衙に関連する施設と目される遺構が確認されている(田畑2004・2017、横山・藤野2010、横山2012・2019・2020、川島・横山2021)。谷の埋土からは、千字文を書写した音義木簡や「官」「主」「口少カ 殿」などが記された墨書土器、円面硯などの文字関連資料、蛇尾未製品や銅鉾石、鞆羽口などの金属鑄造関連資料が出土しており、やはり官衙の存在を強く示唆している。このほか当谷筋に関しては、調査域の南東部に限定して多量の木製品が出土することも注目されている(図75)。木製品には前述の音義木簡のほか、曲物、斧柄、横槌、木錘、杭、建築部材など原形の判明する資料が含まれているものの、そのいずれもが破損品である。出土状況からは、破損した土器および木製品などの廃材を谷底に投棄した様子が見え、近隣地に厨家や木工工房などの施設が存在した可能性を指摘することが可能である。

平成18年度に実施した動物医療センター(旧名称:農学部附属家畜病院)改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査では、谷右岸傾斜地に柱根腐食痕の残る掘立柱建物跡1、1間×2間の小規模建物である掘立柱建物跡2、その建替え建物で、柱根が遺存する大型の掘立柱建物跡3(1間×3間以上)などの遺構が検出されたほか、遺物包含層および谷埋土からは、やはり多量の須恵器片と少量の都城系土師器、緑釉陶器などが出土しており、木製品の廃材も数多く出土した。

出土した木製品に関しては、調査概報刊行時点では、先行して保存処理を行った掘立柱建物跡3の柱根3点以外は樹種同定が行えていなかった(横山・藤野2010)。その他63点の木製品に関しては、高級アルコール法による保存処理と樹種同定を(株)吉田生物研究所に委託し、平成21から24年度にかけて順次実施した。遅ればせながら本稿にて報告を行いたい。なお、樹種同定結果の詳細は本書付篇3に所収している。

## 2. 遺物の出土層位について(図76)

平成18年度の調査では、旧耕土および旧床土下位の基本層序を、遺物包含層L3、谷埋土(水性堆積)L1~4、下位の遺物包含層を大別してL4~6と分類した。その後の調査の層序との対応は、

(平成18年度)                      (平成20年度)                      (平成26年度以降)

遺物包含層 L 3 …………… 遺物包含層 2 …………… 遺物包含層 2

谷埋土 L 1 …………… 谷埋土 1 …………… 谷埋土 1

谷埋土 L 2 …………… 谷埋土 2 …………… 谷埋土 2 上層

谷埋土 L 3 …………… 谷埋土 3 …………… 谷埋土 2 下層

谷埋土 L 4 …………… 谷埋土 3 …………… 谷埋土 2 下層

遺物包含層 8 (L 6) ……谷埋土 4 上層……………谷埋土 3 上層

遺物包含層 9 (L 6) ……谷埋土 4 下層か……………谷埋土 3 下層か

遺物包含層谷10 (L 6) ……谷埋土 5 か……………谷埋土 4 か

となる可能性が高いと思われるが、遺物に関しては大きな相違も見られる。平成18年度調査遺物包含層 8・9(L6)には7世紀後半の土器が多量に含まれるのに対し、平成26年度調査谷埋土3では8世紀代の土器が主体となっており、遺物包含層10(L6)と同一層の可能性のある谷埋土4には遺物がほとんど含まれていなかった。木製品は平成20年度調査谷埋土4上層に、平成26年度調査谷埋土3上層に集中するのに対し、平成18年度調査では遺物包含層8(L6)にも含まれるが、9、10層(L6)から多量の出土を見た。これらの状況から、遊離地点での谷埋土の層序は、安易に同一視すべきでないとする。

### 3. 出土木製品の名称(分類)と概要(図77～81、表11～13)

本稿では、出土木製品における樹種の傾向を考察するため、調査概報に掲載した資料名称に若干の修正を加え、「柱根」「曲物」「刳物」「棒状製品」「角杭」「丸杭」「角材」「板材」「端材」「火付け木」の10種に分類し直した。遺物番号は変更していない。

このうち火付け木としたものは、棒や板状製品の先端または両端が焦げているもので、平成18年度および平成20年度調査報告では「松明」に分類し報告を行ったが、近年は「付け木」「燃えさし」などとして報告される例(藤田2014、浦2021)が散見されるようになった。当館では、平成26年度調査以降は同様の木製品を灯火具(松明)ではなく、着火や移し火に用いたものと判断し、中世後半以降、近代まで使用された民具資料「付け木(ヒノキなどの薄い木片(柿)に硫黄を塗布したもの)」と区別するため、「火付け木」という名称で分類することとしている。

なお、調査概報にて掲載した観察表(110～111頁の表5 出土遺物(木製品)観察表)には誤記が多々存在する<sup>註1</sup>。お詫び申し上げますとともに、本稿をもって修正したい。

#### 遺構出土木製品 掘立柱建物跡3(図77の386～391、393)

Pit3、Pit4、Pit6に遺存していた柱根**386～388**の樹種はいずれもヒノキ科アスナロ属である(吉田生物研究所2010)。いずれも表面に炭化が見られる。**386**は幅細のチョウナ痕が残り、断面楕円形を呈しているが、**387**は11角形、**388**は9角形を呈している。**386、387**の外側下端付近に見られる溝は、エツリ穴(イカダ穴)と同じ役割を有したと考えられる。

**389～391、393**も掘立柱建物跡3を構成する遺構から出土したものである。Pit1出土の板材**389**の樹種はイチイ科カヤ属カヤ、端材**390・391**の樹種はヒノキ科アスナロ属である。SP2出土角材**393**の樹種はイチイ科カヤ属カヤである。

#### 遺構出土木製品 掘立柱建物跡2(図77の392)

掘立柱建物跡2Pit6出土品**392**は、棒状に加工された製品の端部が炭化したもので、火付け木である。樹種はヒノキ科アスナロ属。

#### 谷埋土出土木製品(図78)

総数で13点が出土している。

**397**は平面楕円形(長軸径16.1cm)の曲物蓋で、樹種はヒノキ科アスナロ属。**394**は上下を切断した角材で、作業台として広面(柁目面)を使用している。樹種はヒノキ科アスナロ属。**395・396**は端材で、樹種はともにヒノキ科アスナロ属。**399～406**は板材とした。**400**は図左側部上面が断面方形形状に肥厚していることから、元来刳物であった可能性を有している。**400～402**は端部が斜めに切り落とされており、以降の

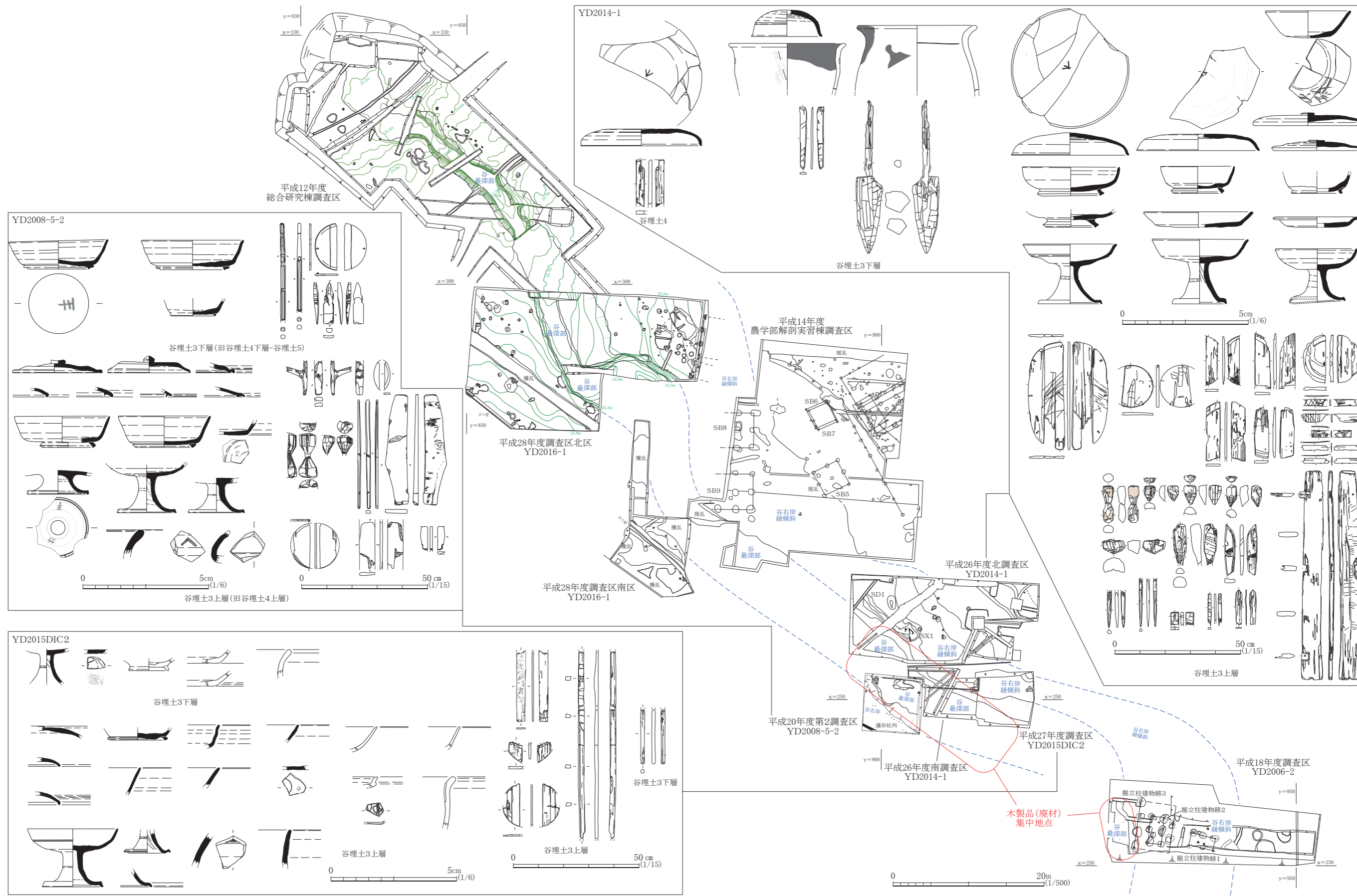
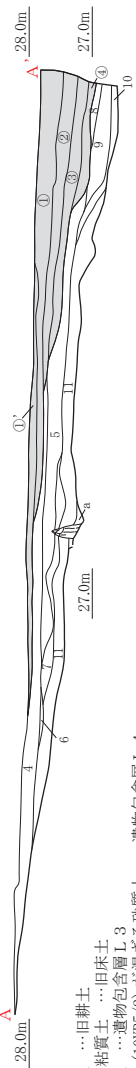


図75 周辺調査区的位置と出土遺物

吉田遺跡古代理没谷出土木製品の木製品(Ⅰ)

【谷埋土】

- ① 黄灰色(2.5Y4/1)砂質土 …谷埋土L1
- ② 灰色(5Y4/1)弱粘質土 …谷埋土L1
- ③ 灰色(5Y4/1)粘性砂質土 …谷埋土L2
- ④ オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘性砂質土 …谷埋土L3
- ⑤ 灰色(7.5Y5/1)粘性砂質土に小礫(0.5~2cmφ)多く混ざる …谷埋土L4



- 1 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 …旧耕土
- 2 灰オリーブ色(7.5Y5/2)弱粘質土 …旧床土
- 3 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土 …遺物包含層L3
- 4 灰黄色(2.5Y6/2)に黄褐色(10YR5/2)が混ざる砂質土 …遺物包含層L4
- 5 灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土 …遺物包含層L5
- 6 灰黄褐色(10YR5/2)粘性砂質土に明黄褐色(2.5Y7/6)砂と炭化物が混ざる …遺物包含層L5
- 7 灰黄褐色(10YR5/2)強粘質土に明黄褐色(2.5Y7/6)砂と炭化物が混ざる …遺物包含層L5
- 8 灰色(5Y4/1)強粘質土 …遺物包含層L6
- 9 暗黄灰色(2.5Y4/2)強粘質土に木製品・自然木多量に混ざる …遺物包含層L6
- 10 暗黄灰色(2.5Y4/2)砂土に木製品・自然木多量に混ざる …遺物包含層L6
- 11 黄灰色(2.5Y5/1)強粘質土に炭化物・自然木等多量に混ざる …遺物包含層L6
- a 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性砂質土 …掘立柱建物跡3Pit5埋土

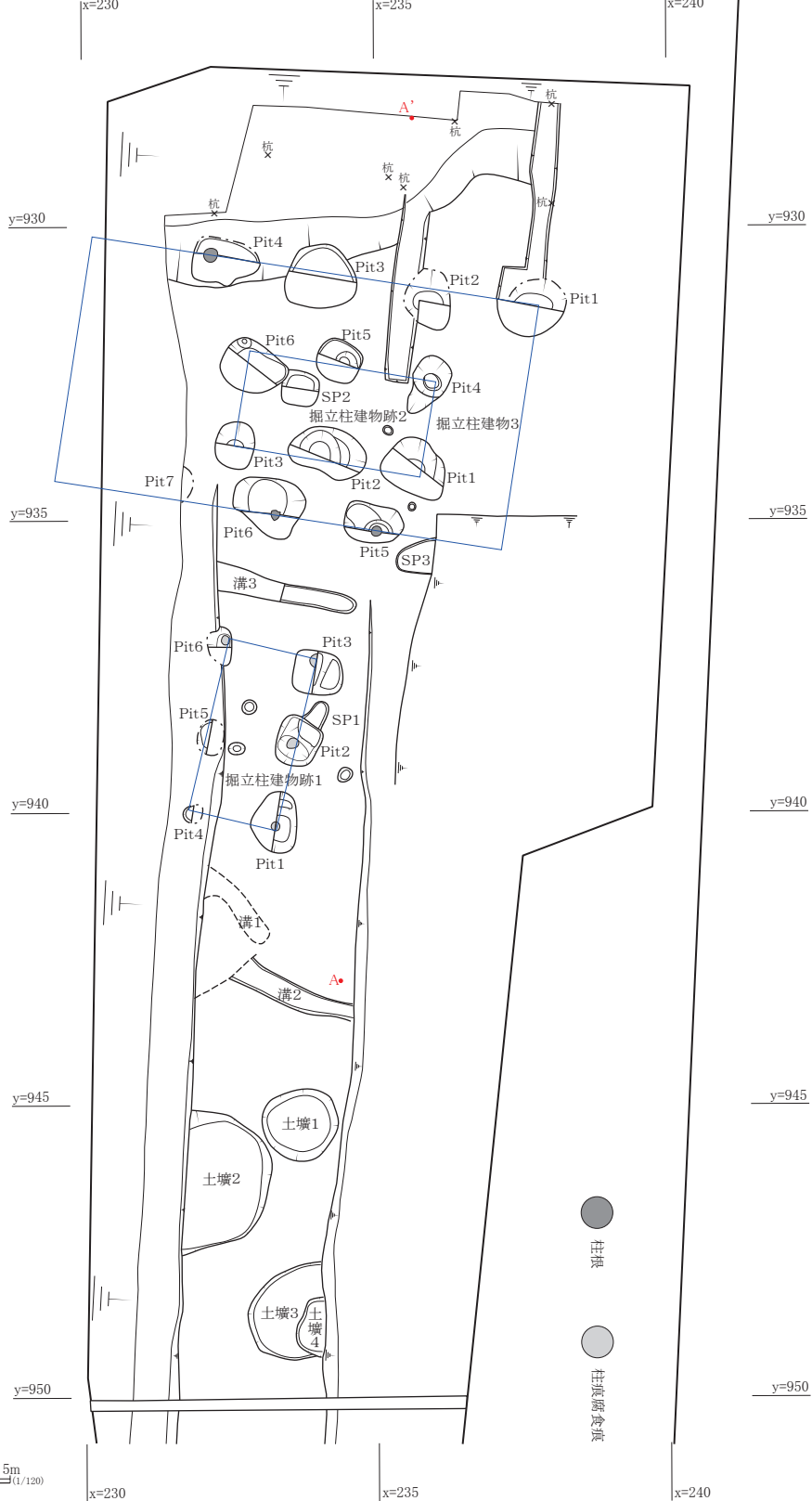
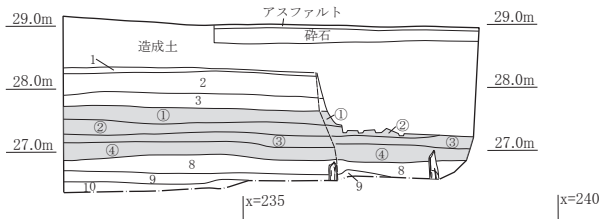


図76 平成18年度調査区平面図・断面図



調査でも同様の特徴を有する廃材が多数確認されている。**401・403**の樹種はイチイ科カヤ属カヤで、他はヒノキ科アスナロ属である。**398**はへら状に加工した材の先端がわずかに炭化した火付け木である。樹種はヒノキ科アスナロ属。

#### 遺物包含層L6出土木製品(図79～83)

総数で45点が出土している。

**430**は平面長方形を呈する刳物で、短辺は底面からほぼ垂直に、長辺は底面から外傾して立ち上がる。深さ2.8cmの刳り抜き部も平面長方形で、底面に向かい内傾して刳り込まれている。樹種はヒノキ科アスナロ属。

板材は15点(**425～429**、**441～448**、**450・451**)出土している。**425～429**は端部が斜めに切り落とされており、**429**は表面が部分的に炭化している。板材については、木簡の可能性も考えられることから、保存処理時に赤外線による調査を依頼しているが、当資料群に墨痕は確認されていない。樹種は**429**がブナ科クリ属クリ、**444**がスギ科スギ属スギ、以外はヒノキ科で**425～428**、**442・443**、**451**の7点がヒノキ属、他の6点がアスナロ属である。

棒状製品は3点(**432・433**、**449**)が出土している。**432**は図上下両端を欠失しており、現存長64cmを測る棒状製品である。図上部断面は不定形な五角形を呈し、図下に向かい緩やかに細まり、断面は台形状に成形されている。**433**は現存長15cmの断面隅丸長方形の棒状製品で、図上部の全周が段状に刳り込まれ、上端で折損している。**449**は現存長31.2cm、断面長方形の棒状製品で、図上端を斜めに切り落としており、図下端は欠損している。樹種は**432**がヒノキ科ヒノキ属、他の2点はヒノキ科アスナロ属。

**411～412**の3点は、ここでは角杭とした。**411**は角材の図下端を3方向から、**412**は2方向から切り落として杭先を成形しているが、図上端は両者ともに水平に切り落とされている。**413**は断面長方形の棒状製品の図下端を杭先状に尖らせたもので、図上端は折損している。現存長39.4cmを測る。樹種はいずれもヒノキ科ヒノキ属である。

**407～410**、**414～416**、**418～420**、**423・424**、**431**の13点は、丸杭または杭とした。**407**、**408**は杭先で、チョウナにより先端部を成形している。**409**は小片であるが杭先の一部である可能性が高い。**410**も図下端にチョウナによる切り落とし痕が残るが、柱材などの可能性もある。**414**の杭先にはチョウナ痕が明瞭に残り、**415**は腐食が進行しているため不明瞭である。**423・424**の図下端にも切り落とし面が認められるため、杭先の可能性がある。**416**、**418～420**、**431**には杭先が見られないが、切断面が見られることから、自然木ではなく杭の一部と見なしておく。これらの樹種は多様で、イチイ科カヤ属カヤ、バラ科サクラ属、ハイノキ科ハイノキ属、キブシ科キブシ属キブシ、ツバキ科ヒサカキ属、ブナ科ではクリ属クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が見られる。

火付け木は7点(**434～440**)が出土している。いずれも棒状、もしくはへら状の加工木で、資料数は少ないながら、全長から大型(長さ25cm程度 **434～436**)、中型(長さ15cm程度 **437**)、小型(長さ10cm程度 **438～440**)の3種に分類可能である。**434～438**は一方の端部(図下端)のみが炭化しており、**439・440**は両端が炭化している。樹種は**436**、**439**がヒノキ科ヒノキ属、他はマキ科マキ属イヌマキ。

**417**、**421・422**は不整形な端材である。**422**は全面が炭化している。樹種は**417**がヒノキ科ヒノキ属、**421**がヒノキ科アスナロ属、**422**がブナ科コナラ属アカガシ亜属である。

このほか、遺物包含層L6には多数の自然木が遺存していたが、調査では加工痕が認められたものだけをあげたため、自然木の樹種を確認できていない。試料として回収すべきもので、浅慮を恥じるばかりである。

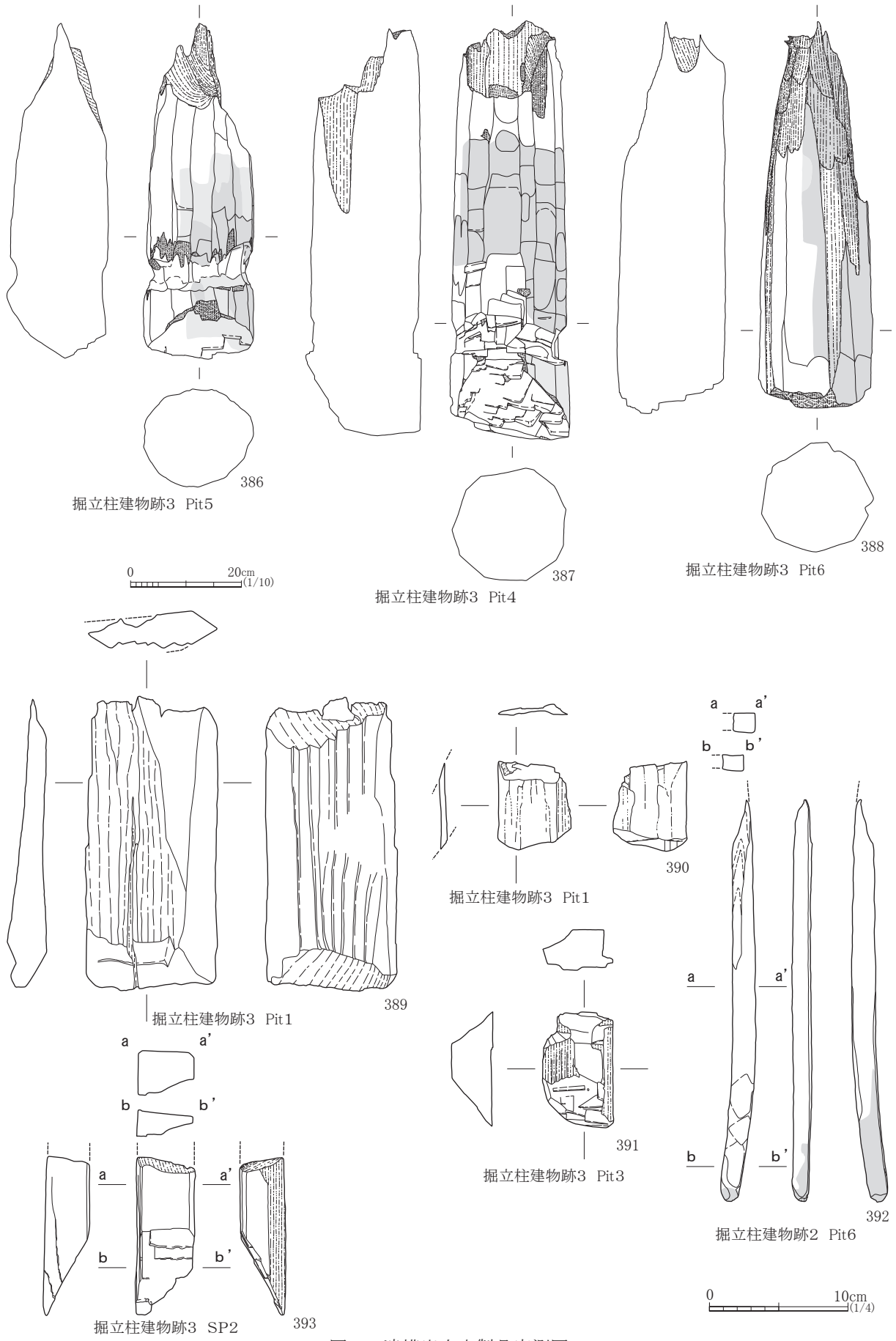


図 77 遺構出土木製品実測図

吉田遺跡古代埋没谷出土木製品の木製品(1)

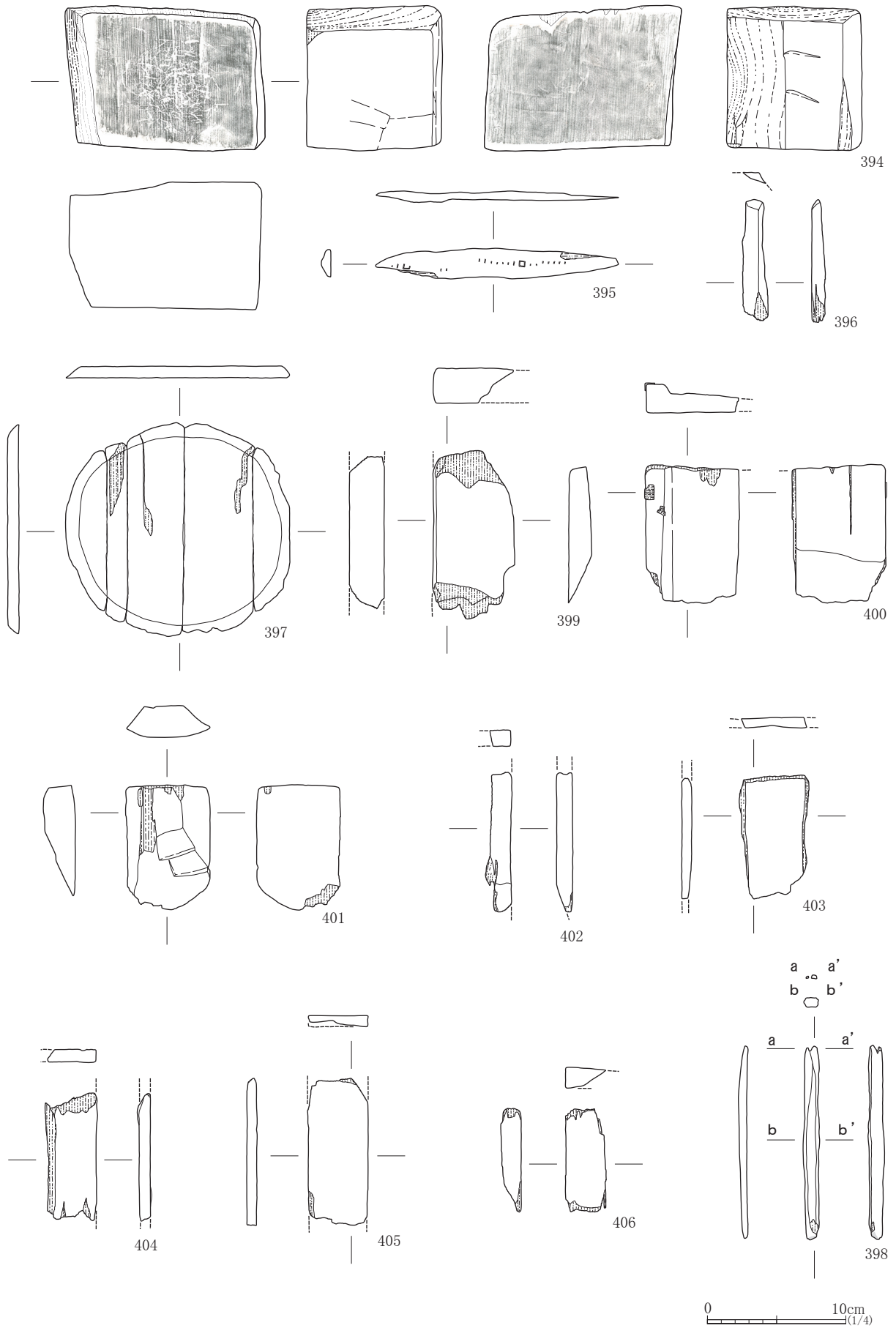


図 78 谷埋土出土木製品実測図

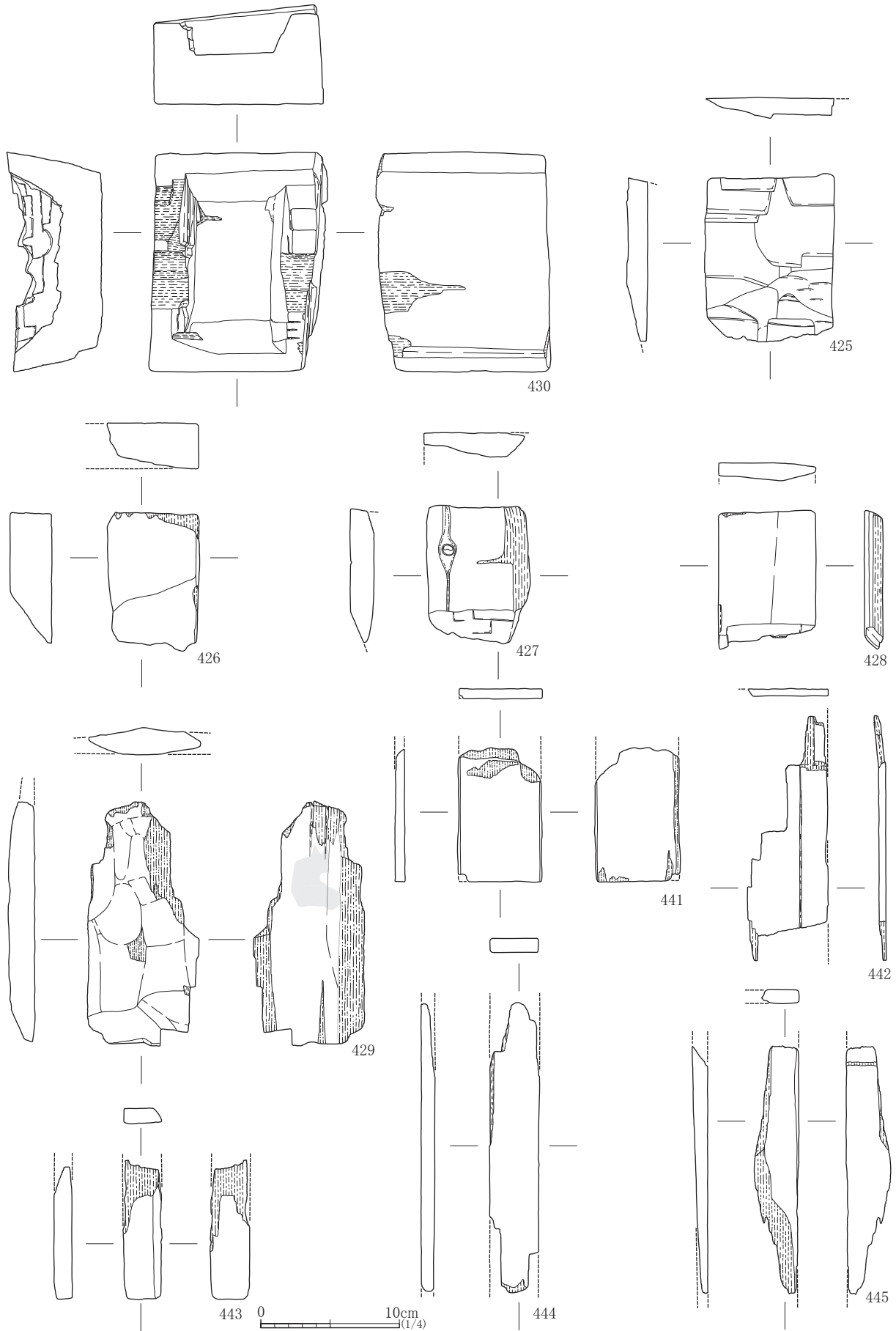


图 79 遺物包含層L6出土木製品実測図①



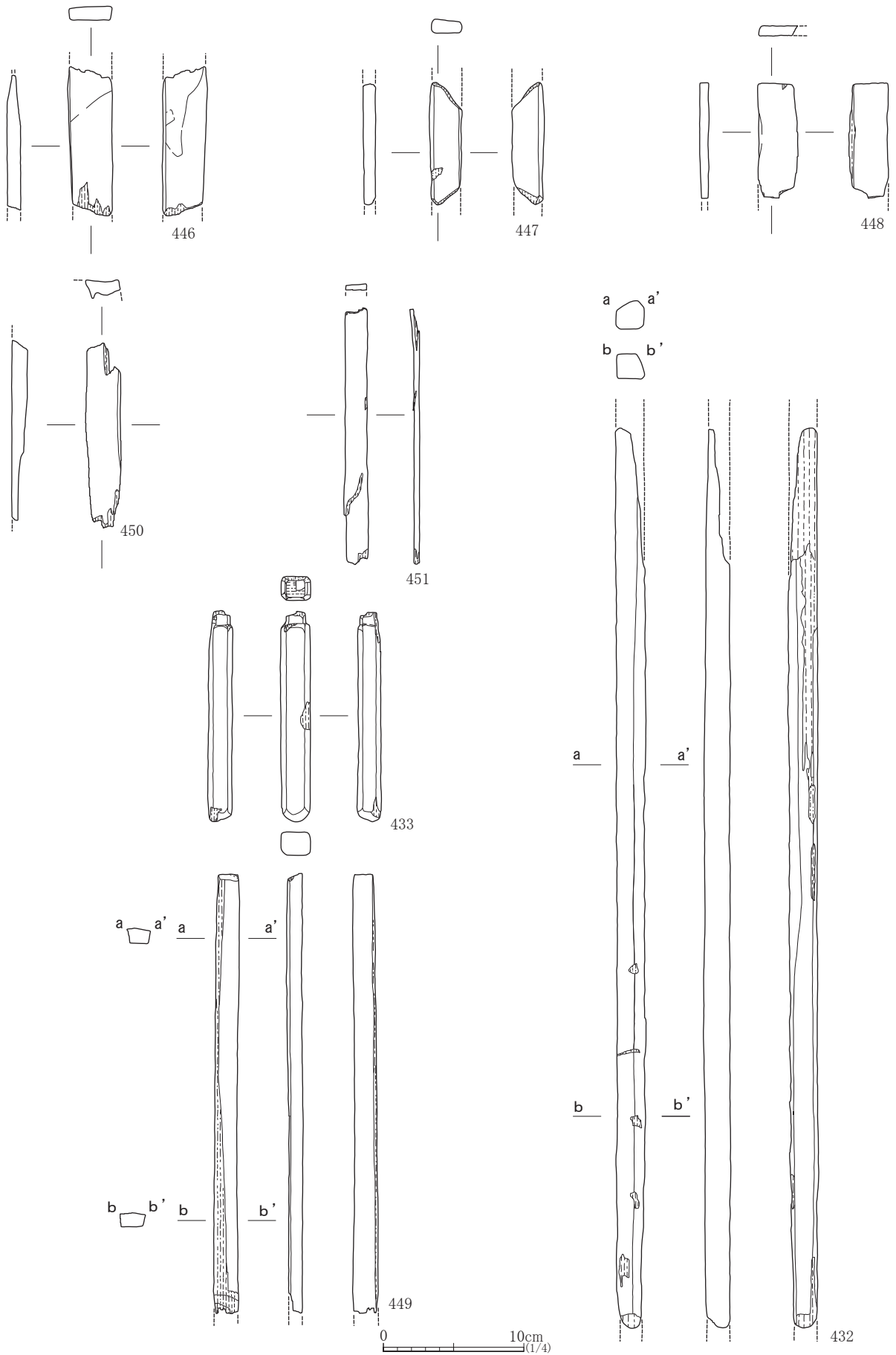


図80 遺物包含層L6出土木製品実測図②

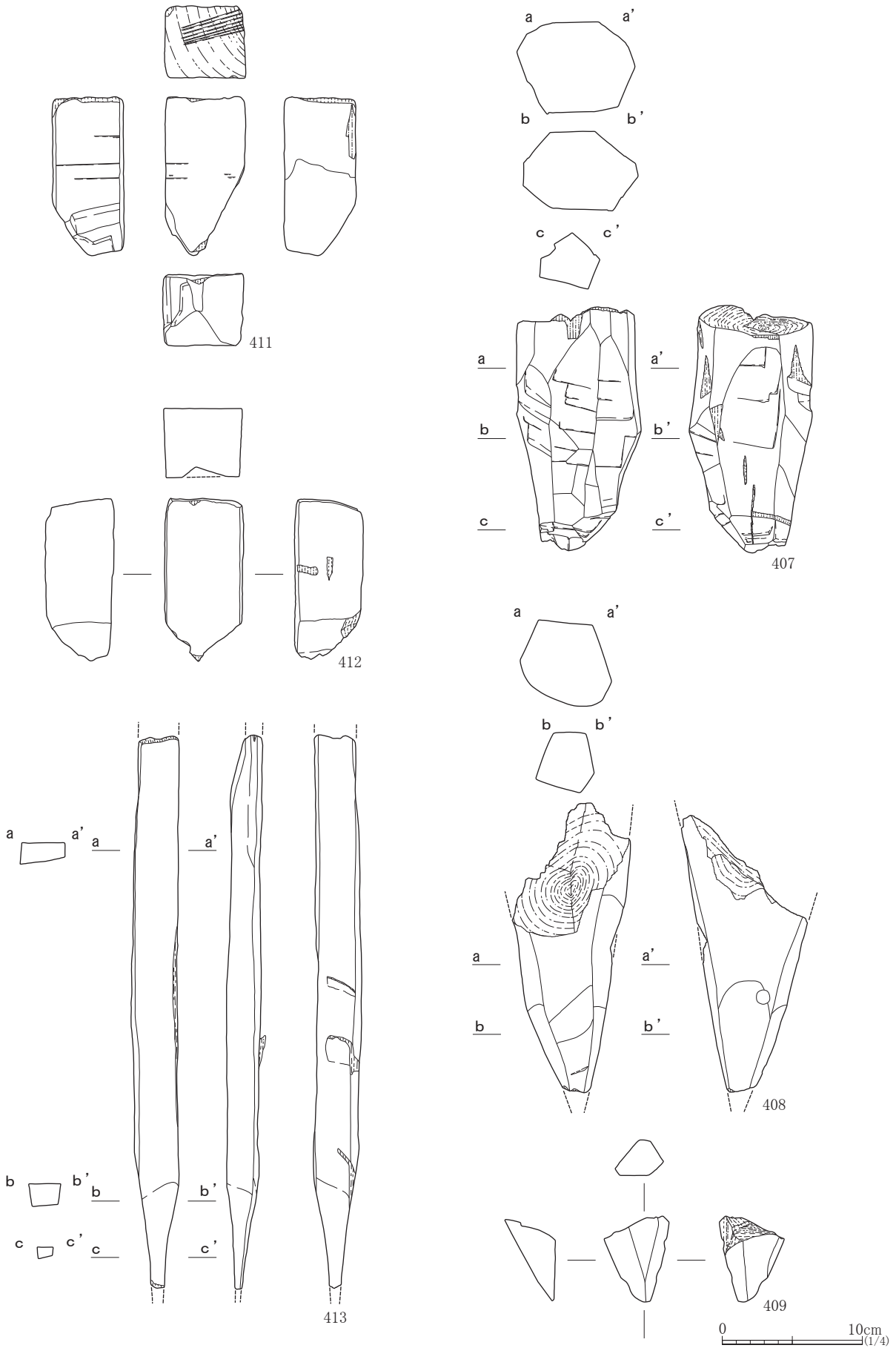
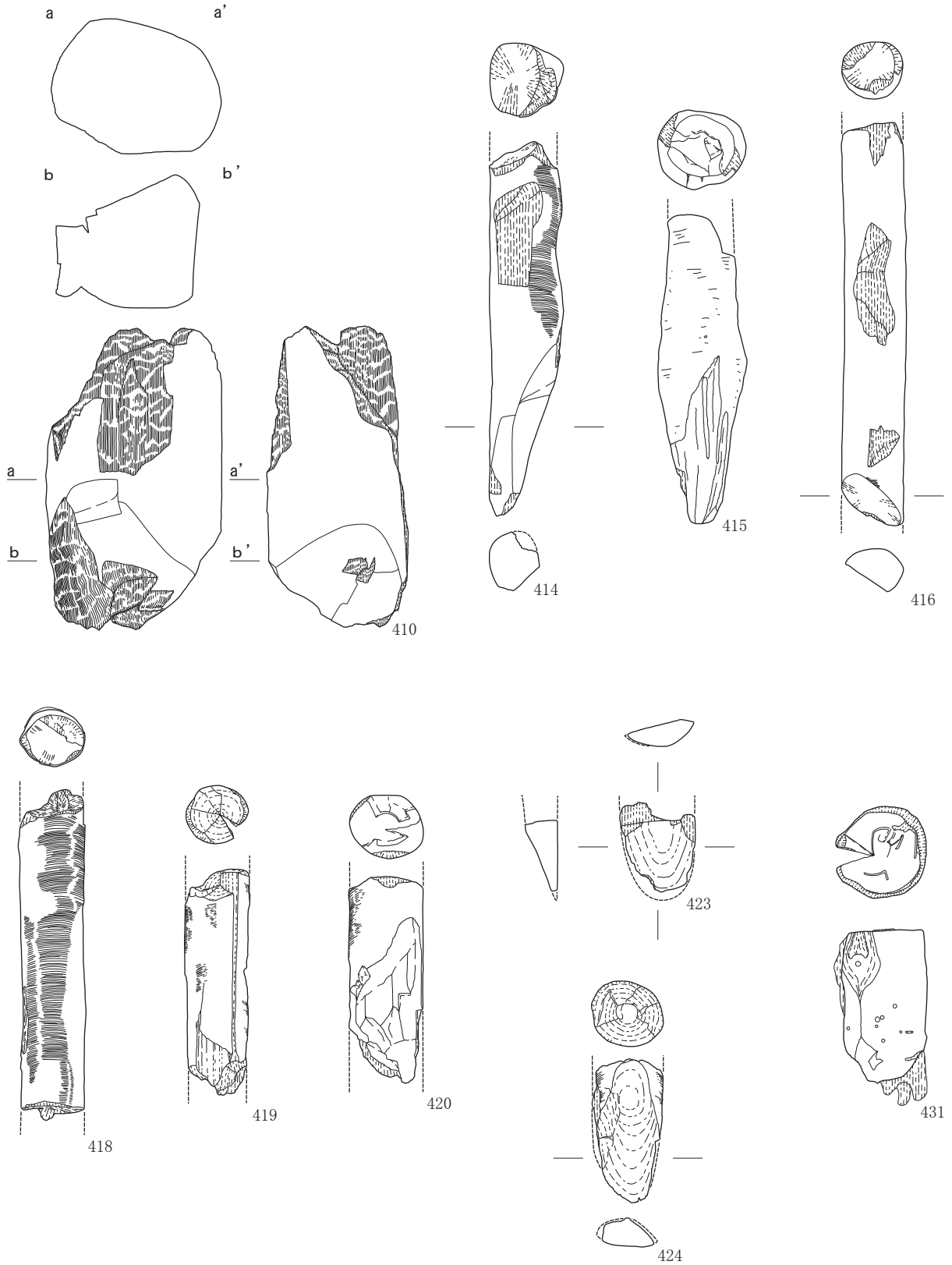
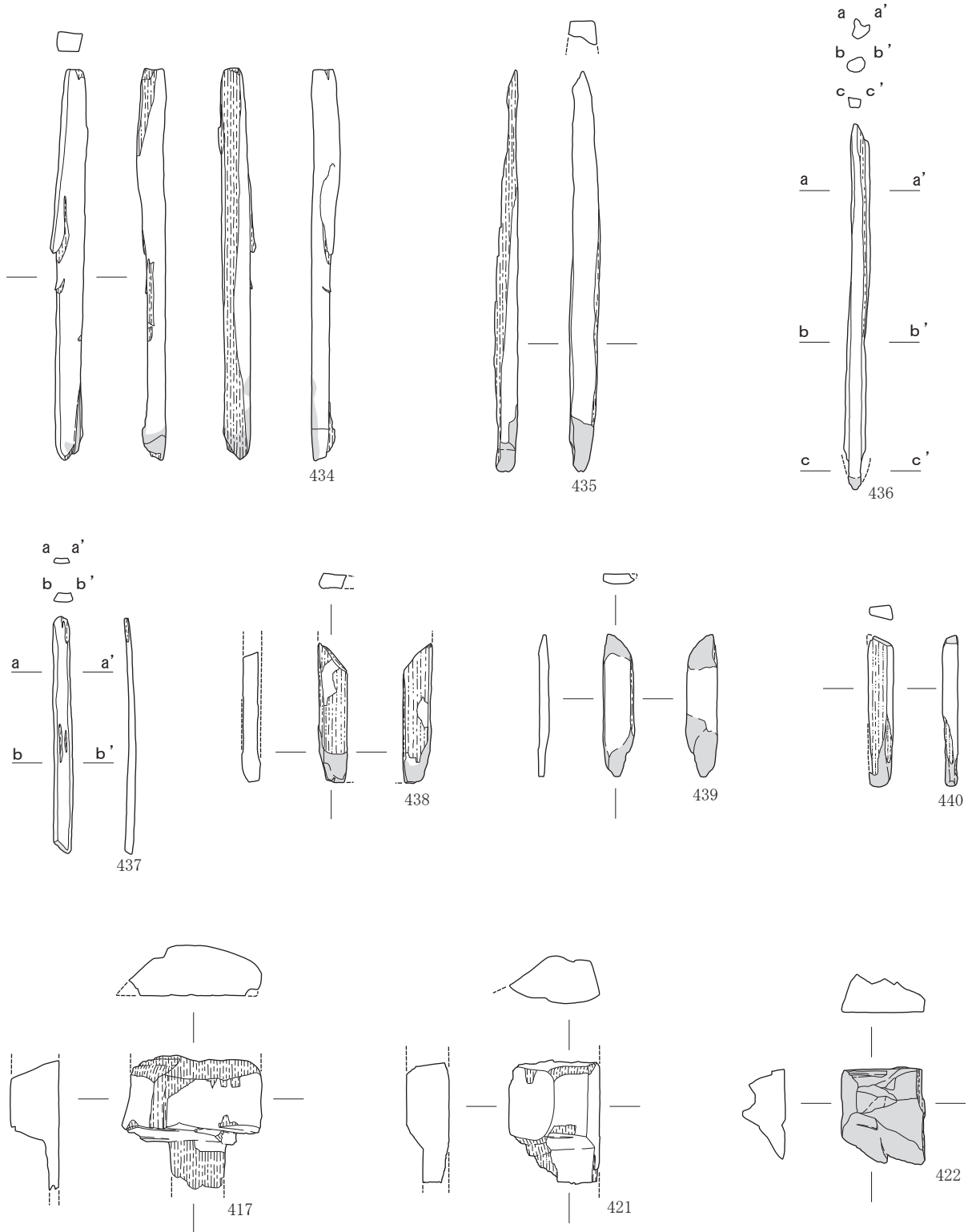


図 81 遺物包含層L6出土木製品実測図③



0 10cm (1/4)

图 82 遺物包含層L6出土木製品実測図④



0 10cm (1/4)

図 83 遺物包含層L6出土木製品実測図⑤

表 11 遺構出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
386	掘立柱建物3 Pit5	柱	残長60.5 最大径19.7	ヒノキ科アスナロ属	表面が炭化する
387	掘立柱建物3 Pit4	柱	残長75.7 最大径21.5	ヒノキ科アスナロ属	表面が炭化する
388	掘立柱建物3 Pit6	柱	残長69.8 最大径20.3	ヒノキ科アスナロ属	表面が炭化する
389	掘立柱建物3 Pit1	板材	残長20.2 残幅9.2 残厚1.9	イチイ科カヤ属カヤ	
390	掘立柱建物3 Pit1	端材	残長6.6 残幅5.2 残厚0.5	ヒノキ科アスナロ属	
391	掘立柱建物3 Pit3	端材	残長8.3 残幅5.2 残厚3.0	ヒノキ科アスナロ属	
393	掘立柱建物3 SP2	角材	残長11.3 残幅4.0 残厚3.2	イチイ科カヤ属カヤ	
392	掘立柱建物2 Pit6	火付け木	残長29.0 残幅1.6 残厚1.4	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化する

表 12 谷埋土出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
397	谷埋土	曲物蓋	最大径16.1 厚み0.9	ヒノキ科アスナロ属	
394	谷埋土	角材(作業台)	長さ10.5 幅13.9 厚み9.2	ヒノキ科アスナロ属	
395	谷埋土	端材	残長17.5 幅2.1 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
396	谷埋土	端材	残長8.8	ヒノキ科アスナロ属	
399	谷埋土	板材	残長12.1 残幅5.8 厚み2.5	ヒノキ科アスナロ属	
400	谷埋土	板材	残長10.0 残幅6.7 最大厚2.1	ヒノキ科ヒノキ属	
401	谷埋土	板材	長さ8.0 幅6.1 最大厚2.3	イチイ科カヤ属カヤ	
402	谷埋土	板材	残長10.0 残幅1.5 厚み1.2	ヒノキ科アスナロ属	
403	谷埋土	板材	残長9.1 残幅4.7 厚み0.7	イチイ科カヤ属カヤ	
404	谷埋土	板材	残長8.2 残幅3.5 厚み0.9	ヒノキ科アスナロ属	
405	谷埋土	板材	残長10.6 幅4.3 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
406	谷埋土	板材	残長7.5 残幅2.9 厚み1.5	ヒノキ科アスナロ属	
398	谷埋土	火付け木	長さ13.9 幅1.1 最大厚0.6	ヒノキ科アスナロ属	一方の先端が炭化する

表 13 遺物包含層L6出土木製品観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
430	遺物包含層 L6	刳物	長さ15.8 幅12.3 厚み6.9 内法 上端長さ13.1 上端幅 8.0 下端長さ8.5 下端幅 5.4 深さ2.7	ヒノキ科アスナロ属	
425	遺物包含層 L6	板材	残長22.1 残幅9.2 残厚1.5	ヒノキ科ヒノキ属	
426	遺物包含層 L6	板材	残長10.0 残幅6.6 厚み3.3	ヒノキ科ヒノキ属	
427	遺物包含層 L6	板材	残長9.9 残幅7.2 最大厚1.7	ヒノキ科ヒノキ属	
428	遺物包含層 L6	板材	残長10.0 幅7.0 厚み1.2	ヒノキ科ヒノキ属	
429	遺物包含層 L6	板材	残長17.4 残幅8.0 最大厚2.0	ブナ科クリ属クリ	表面が炭化する
441	遺物包含層 L6	板材	残長9.6 幅6.0 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
442	遺物包含層 L6	板材	残長17.6 残幅5.8 厚み0.5	ヒノキ科ヒノキ属	
443	遺物包含層 L6	板材	残長10.0 幅2.7 厚み1.3	ヒノキ科ヒノキ属	



## 吉田遺跡古代埋没谷出土木製品の木製品(1)

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	樹種	備考
444	遺物包含層 L6	板材	残長20.7 幅3.5 厚み1.0	スギ科スギ属スギ	
445	遺物包含層 L6	板材	残長17.8 残幅3.2 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	
446	遺物包含層 L6	板材	残長10.6 幅3.1 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	
447	遺物包含層 L6	板材	残長8.7 幅2.3 厚み1.0	ヒノキ科アスナロ属	
448	遺物包含層 L6	板材	残長8.2 残幅2.8 厚み0.7	ヒノキ科アスナロ属	
450	遺物包含層 L6	板材	残長13.0 残幅2.5 残厚1.3	ヒノキ科アスナロ属	
451	遺物包含層 L6	板材	残長17.2 幅1.5 厚み0.4	ヒノキ科ヒノキ属	
432	遺物包含層 L6	棒状製品	残長64.0 幅2.0 厚み1.8	ヒノキ科ヒノキ属	
433	遺物包含層 L6	棒状製品	長さ15.0 幅2.1 厚み1.6	ヒノキ科アスナロ属	
449	遺物包含層 L6	棒状製品	残長31.2 幅1.8 厚み0.9	ヒノキ科アスナロ属	
411	遺物包含層 L6	角杭	残長11.3 幅5.7 厚み5.0	ヒノキ科アスナロ属	
412	遺物包含層 L6	角杭	残長11.6 幅5.6 厚み4.9	ヒノキ科アスナロ属	
413	遺物包含層 L6	角杭	残長39.4 幅3.1 最大厚1.6	ヒノキ科アスナロ属	
407	遺物包含層 L6	杭	残長17.4 幅8.9 厚6.4	イチイ科カヤ属カヤ	
408	遺物包含層 L6	杭	残長19.6 残幅7.6 残厚6.1	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	
409	遺物包含層 L6	杭か	残長6.1 残幅4.6 残厚4.6	バラ科サクラ属	
410	遺物包含層 L6	杭か	残長20.5 幅11.9 厚み9.0	ハイノキ科ハイノキ属	
414	遺物包含層 L6	丸杭	残長25.3 最大径5.0	キブシ科キブシ属キブシ	
415	遺物包含層 L6	丸杭	残長20.9 最大径6.0	ブナ科クリ属クリ	
416	遺物包含層 L6	丸杭か	残長27.3 最大径4.2	キブシ科キブシ属キブシ	切断面が残る
418	遺物包含層 L6	丸杭か	残長22.4 最大径4.5	ツバキ科ヒサカキ属	切断面が残る
419	遺物包含層 L6	丸杭か	残長15.3 最大径4.2	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	切断面が残る
420	遺物包含層 L6	丸杭か	残長14.0 最大径5.0	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	切断面が残る
423	遺物包含層 L6	丸杭	残長6.0 最大径5.1	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
424	遺物包含層 L6	丸杭	残長9.7 最大径4.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	
431	遺物包含層 L6	丸杭か	残長11.9 最大径6.5	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	切断面が残る
434	遺物包含層 L6	火付け木	残長25.9 幅1.8 厚み1.3	マキ科マキ属イヌマキ	一方の先端が炭化する
435	遺物包含層 L6	火付け木	残長26.5 残幅1.9 残厚1.6	マキ科マキ属イヌマキ	一方の先端が炭化する
436	遺物包含層 L6	火付け木	残長25.1 残幅1.2 残厚1.0	ヒノキ科ヒノキ属	一方の先端が炭化する
437	遺物包含層 L6	火付け木	残長15.7 幅1.1 厚み0.6	マキ科マキ属イヌマキ	一方の先端が炭化する
438	遺物包含層 L6	火付け木	残長9.2 幅1.9 厚み1.0	マキ科マキ属イヌマキ	一方の先端が炭化する
439	遺物包含層 L6	火付け木	残長9.3 残幅2.0 厚み0.7	ヒノキ科ヒノキ属	両端が炭化する
440	遺物包含層 L6	火付け木	残長10.0 幅1.6 厚み1.0	マキ科マキ属イヌマキ	両端が炭化する
417	遺物包含層 L6	端材	残長8.8 残幅8.8 厚み3.2	ヒノキ科ヒノキ属	
421	遺物包含層 L6	端材	残長8.1 残幅6.0 残厚3.1	ヒノキ科アスナロ属	
422	遺物包含層 L6	端材	残長6.3 残幅5.5 残厚2.8	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	全体が炭化している

#### 4. 樹種に見る木製品の特徴(表14~16)

柱根を含め、遺構埋土から出土した木製品8点の樹種は、針葉樹のヒノキ科アスナロ属(6点)とイチイ科カヤ属カヤ(2点)に限られている。谷埋土から出土した木製品13点の樹種も同様の傾向を見せており、ヒノキ科アスナロ属(10点)とヒノキ属(1点)、イチイ科カヤ属カヤ(2点)に限られる。

一方、遺物包含層L6から出土した木製品45点には12種が確認されているが、全体での割合はヒノキ科が50%強を占めており、ブナ科の20%、マキ科マキ属イヌマキの11.4%を除くと他の樹種は5%未満(1~2点)である。

木製品の分類から概観すると、曲物などの製品と板・角・端材22点ではヒノキ科が86.4%(19点)で大多数を占めており、他は針葉樹のスギ、落葉広葉樹のブナ科クリ属クリ、常緑広葉樹のブナ科コナラ属アカガシ亜属であり、いずれも1点のみの出土である。遺構や谷埋土出土木製品の樹種割合からみても、建材や各種道具類の材として、ヒノキ科の樹木が主に使用されたと考えて良い。

これに対し、丸杭(杭)とした木製品13点の樹種はバリエーションに富んでおり、8種が確認されている。広葉樹のブナ科が53.9%(7点)とおよそ半数を占めており、バラ科サクラ属、ハイノキ科ハイノキ属、キブシ科キブシ属キブシ、ツバキ科ヒサカキ属とも広葉樹で、針葉樹はイチイ科カヤ属カヤの1種1点のみである。

以上の傾向からみると、形状から角杭とした3点の木製品は、いずれもヒノキ科アスナロ属であることから、杭として製作されていない可能性が高い。

火付け木7点の樹種は針葉樹に限られており、マキ科マキ属イヌマキが71.6%(5点)を占め、他はヒノキ科ヒノキ属2点である。ただし、遺構および谷埋土から出土した火付け木2点の樹種がいずれもヒノキ科アスナロ属であることから、着火や移し火に際しては、ヒノキ科樹木とイヌマキが選択的に用いられたと理解しておきたい。

表14 遺構出土木製品の樹種

木製品全点

樹種	ヒノキ科アスナロ属	ヒノキ科ヒノキ属	スギ科スギ属スギ	イチイ科カヤ属カヤ	マキ科マキ属イヌマキ	ブナ科クリ属クリ	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	バラ科サクラ属	ハイノキ科ハイノキ属	キブシ科キブシ属キブシ	ツバキ科ヒサカキ属	総数
点数	6	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8
%	75	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	100

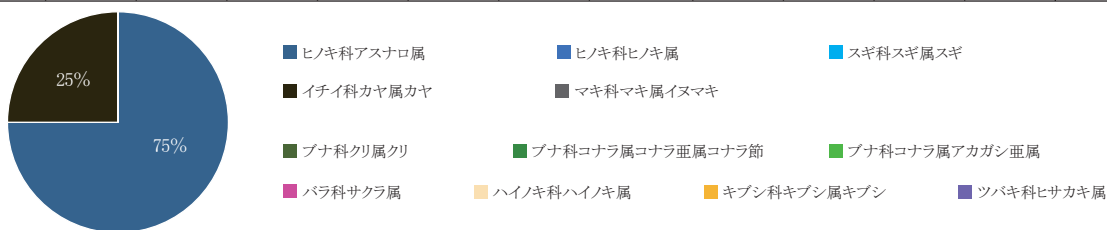


表15 谷埋土出土木製品の樹種

木製品全点

樹種	ヒノキ科アスナロ属	ヒノキ科ヒノキ属	スギ科スギ属スギ	イチイ科カヤ属カヤ	マキ科マキ属イヌマキ	ブナ科クリ属クリ	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	バラ科サクラ属	ハイノキ科ハイノキ属	キブシ科キブシ属キブシ	ツバキ科ヒサカキ属	総数
点数	10	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	13
%	76.9	7.7	0	15.4	0	0	0	0	0	0	0	0	100

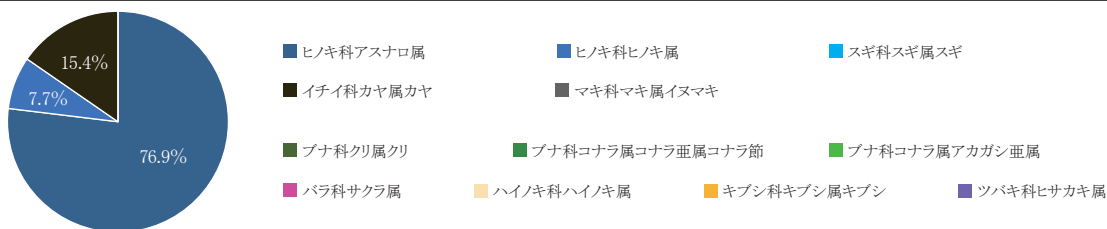
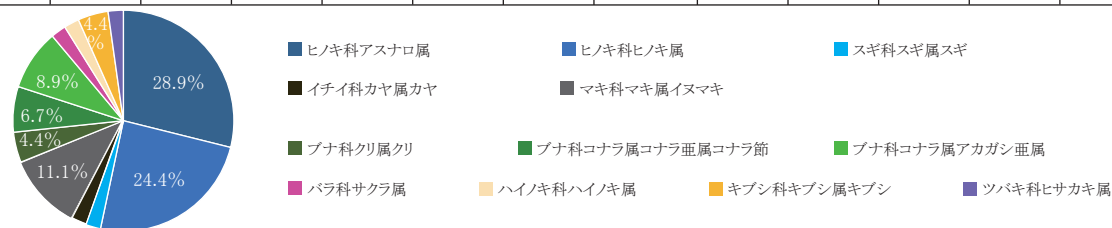


表16 遺物包含層L6出土木製品の樹種

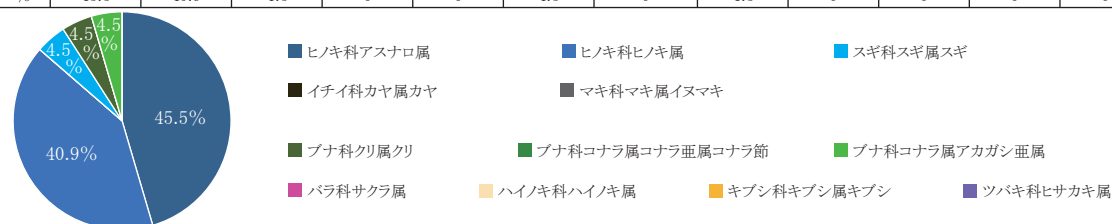
木製品全点

樹種	ヒノキ科 アスナロ属	ヒノキ科 ヒノキ属	スギ科 スギ属スギ	イチイ科 カヤ属カヤ	マキ科 マキ属イヌマキ	ブナ科 クリ属クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	キブシ科 キブシ属キブシ	ツバキ科 ヒサカキ属	総数
点数	13	11	1	1	5	2	3	4	1	1	2	1	45
%	28.9	24.4	2.2	2.2	11.1	4.4	6.7	8.9	2.2	2.2	4.4	2.2	99.8



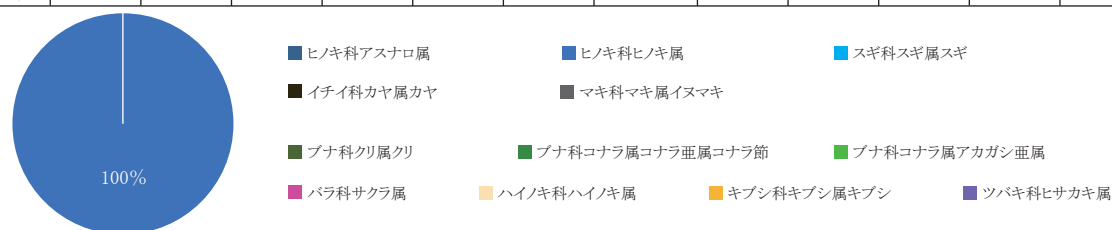
製品・板角材・端材

樹種	ヒノキ科 アスナロ属	ヒノキ科 ヒノキ属	スギ科 スギ属スギ	イチイ科 カヤ属カヤ	マキ科 マキ属イヌマキ	ブナ科 クリ属クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	キブシ科 キブシ属キブシ	ツバキ科 ヒサカキ属	総数
点数	10	9	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	22
%	45.5	40.9	4.5	0	0	4.5	0	4.5	0	0	0	0	99.9



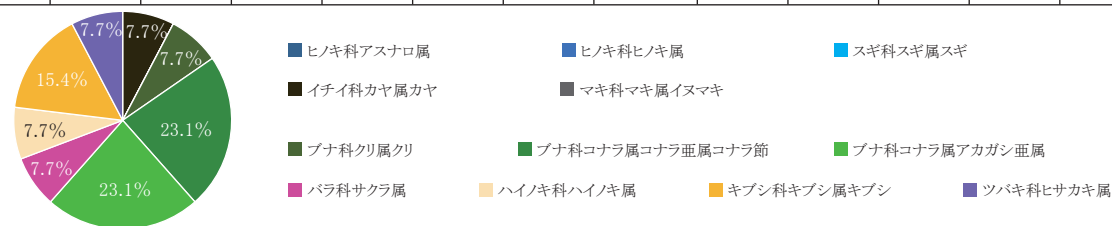
角杭

樹種	ヒノキ科 アスナロ属	ヒノキ科 ヒノキ属	スギ科 スギ属スギ	イチイ科 カヤ属カヤ	マキ科 マキ属イヌマキ	ブナ科 クリ属クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	キブシ科 キブシ属キブシ	ツバキ科 ヒサカキ属	総数
点数	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
%	100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100



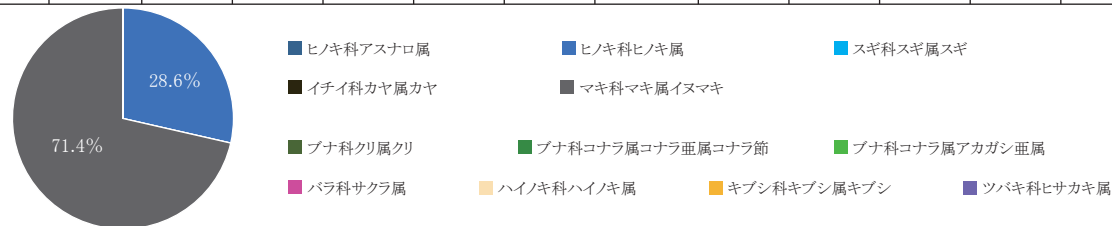
丸杭

樹種	ヒノキ科 アスナロ属	ヒノキ科 ヒノキ属	スギ科 スギ属スギ	イチイ科 カヤ属カヤ	マキ科 マキ属イヌマキ	ブナ科 クリ属クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	キブシ科 キブシ属キブシ	ツバキ科 ヒサカキ属	総数
点数	0	0	0	1	0	1	3	3	1	1	2	1	13
%	0	0	0	7.7	0	7.7	23.1	23.1	7.7	7.7	15.4	7.7	100.1



火付け木

樹種	ヒノキ科 アスナロ属	ヒノキ科 ヒノキ属	スギ科 スギ属スギ	イチイ科 カヤ属カヤ	マキ科 マキ属イヌマキ	ブナ科 クリ属クリ	ブナ科 コナラ属 コナラ亜属コナラ節	ブナ科 コナラ属 アカガシ亜属	バラ科 サクラ属	ハイノキ科 ハイノキ属	キブシ科 キブシ属キブシ	ツバキ科 ヒサカキ属	総数
点数	0	2	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	7
%	0	28.6	0	0	71.4	0	0	0	0	0	0	0	100



## 5. 2種の火付け木

火付け木に関しては、平城京ではヒノキが用いられていることが指摘されており、木製品製作時の端材や廃材が用いられたと推測されている(浦2021)。同じく遠方の資料ではあるが、大丹保遺跡出土(富山県砺波市)から出土した10点の樹種は、ヒノキ(5点)、アスナロ(4点)、マツ属(1点)であり、やはり木製品製作過程で生じた端材を利用し、点火具として使用するため先端部だけを加工したと推測されている(藤田2014、2019)。山口県内では長登銅山跡(美祢市)での出土資料<sup>註2</sup>が挙げられる。大切ⅢC区1Tの谷埋土から多量に出土しており(図示は6点)、樹種はヒノキとされている。大切ⅢB区1Tの谷埋土28層(8世紀)からも数多く出土したとされるが、図示されたのは10点のみで、樹種はやはりヒノキとされる(池田ほか1993)。周防鑄銭司跡(山口市)からも先端が炭化した棒・板状製品が複数出土しているものの、報告書には樹種等詳細な記述がない(小田ほか1978)。このように見ると、古代の遺跡において火付け木は特異な存在ではなく、木製品製作過程で生じたヒノキ科樹木の端材を用いることが通例であったと考えられ、吉田遺跡においても一定数の存在から同様の風習であったと考えられる。その一方で、吉田遺跡では建材や工具、容器などの材として使用された形跡のないイヌマキが、火付け木として相当の割合を占めている状況を、どのように解釈するべきであろうか。

ヒノキ科樹木は着火性に優れることから、現在でもアウトドアシーンで薪として目にすることが多い。木製品製作過程で多数生じる端材であるばかりでなく、その性質も材の選択に大きく影響した可能性が指摘できる。

他方イヌマキは、当県では生垣用樹として日常的に目にするが、防火用樹としての役割もあるらしく、さらに耐水性があることから建築材(屋根板や天井板、縁板)に使用されるほか、桶や水槽、漁網の浮子などにも用いられている。さらに樹脂が多いことから、薪炭材としても利用されるそうである(林1969、西川・片山1977)。ヒノキ科と同じ針葉樹ではあるが、着火性に劣るものの火持ちは良い、ということであろう。

このように見ると、吉田遺跡では選択的に2種の樹木を用いた可能性が高いと思われる。短期的な火の使用にはヒノキ科を、一定時間が必要な火の使用にはイヌマキを用いたのではなかろうか。

火付け木は先端部が炭化しただけの端材であることから、発掘調査により出土したとしても、報告では割愛されやすい資料であろう。長登銅山跡、周防鑄銭司跡はいずれも金属鑄造を行う古代の官衙遺跡であり、吉田遺跡においても出土遺物から金属鑄造が行われたことが確実視されることから、遺跡の性格に結びつく重要な要素となる可能性を秘めている。今後の報告事例の増加を期待したい。

## 6. 花粉分析と木製品の樹種(図75、84・85)

平成14年度に実施された農学部校舎他改修(解剖実習棟校舎新営)に伴う発掘調査(田畑2004)では、埋没谷<sup>註4</sup>の右岸が検出されており、南北に並ぶ総柱建物跡や柵列等を確認している(図75)。当調査では、谷埋土を含む堆積層の花粉分析も実施されている(野井2004)ことから、ここで分析結果と木製品樹種との関係を確認しておきたい。

花粉分析の試料採取は、旧床土以下、谷埋土最下層の8・9層を除く全層で行われた(図84)が、分析されたのは3層(試料A3 黒褐色シルト)と4層(試料A4 灰色シルトに数cm大の礫・粗砂を多く含む)、5層(試料B2 灰色シルトに粗砂・シルトブロックを含む)、7層(試料B5 灰色粘土)である。正式な調査報告書が未刊行であることから断定はできないが、平成26年度に隣接地で実施した動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う発掘調査(横山2019)にて確認された層序と対応させると、下位より10層＝谷埋土5、9層＝谷埋土4、7層＝谷埋土3上層、6層＝谷埋土2下層、5層＝谷埋土2上

層、4層=谷埋土1、3層=遺物包含層2、2層=遺物包含層1となる可能性が高い。平成26年度調査では、谷埋土3上層から多量の木製品廃材が投棄された状況で出土している。

野井氏による花粉分析では、7層堆積時の植生は「潜在自然植生であるシイ類・カシ類を種とする照葉樹林が今回の調査区周辺の広い範囲で残されていた」とする一方で、「イネ科花粉も60%程度検出され、マツ科花粉もみられることからすると、調査区の範囲に限ってみると、人間の植生への干渉がすでに始まっており、住居・水田・畑地など開発を目的とした照葉樹林の破壊が行われ、イネ科雑草が茂る地域や二次林のマツもみられたであろう」とされている(図85)。

すでに見たように、出土したブナ科の木製品は極少量で、杭としての利用にほぼ限定されるようであり、マツを用いた木製品も確認されていない。それに対し、分析では木製品の主な材であったヒノキ科の花粉が検出されておらず、その飛散距離を考えると違和感を覚える。筆者はかつて、掘立柱建物跡3に遺存したヒノキ科アスナロ属の柱根に溝が抉り込まれていることから、遠隔地からの柱材の輸送を想定したが、現状では柱材ばかりでなく、各種木製品製作のために、多量のヒノキ科樹木を遠隔地から吉田の地に運搬したと考えざるを得ない。

## 7. おわりに

平成18年度の発掘調査から15年以上が経過し、遅きに失した感があるものの、本稿では古代の埋没谷に遺存した木製品を再報告し、樹種を中心に若干の考察を行った。現在は平成20年度調査で出土した木製品の再整理に着手しており、近い将来に報告を行う予定である。

谷に投棄されているの木製品の多くは、役割を終えた廃材であり、元来の用途も不明なものが多い。加工痕が残る以上、調査では遺物として回収すべきものであるが、その後の水漬け保管の労力や保存処理の経費を考えると、頭を悩ませる資料でもある。本稿が地方における官衙運営を考察する上で何らかの端緒となれば望外の喜びである。

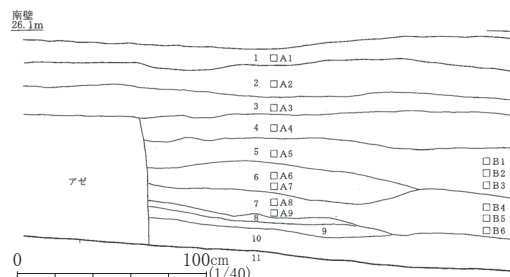


図84 花粉分析試料採取層準 (野井2004Fig.83を転載・一部修正)

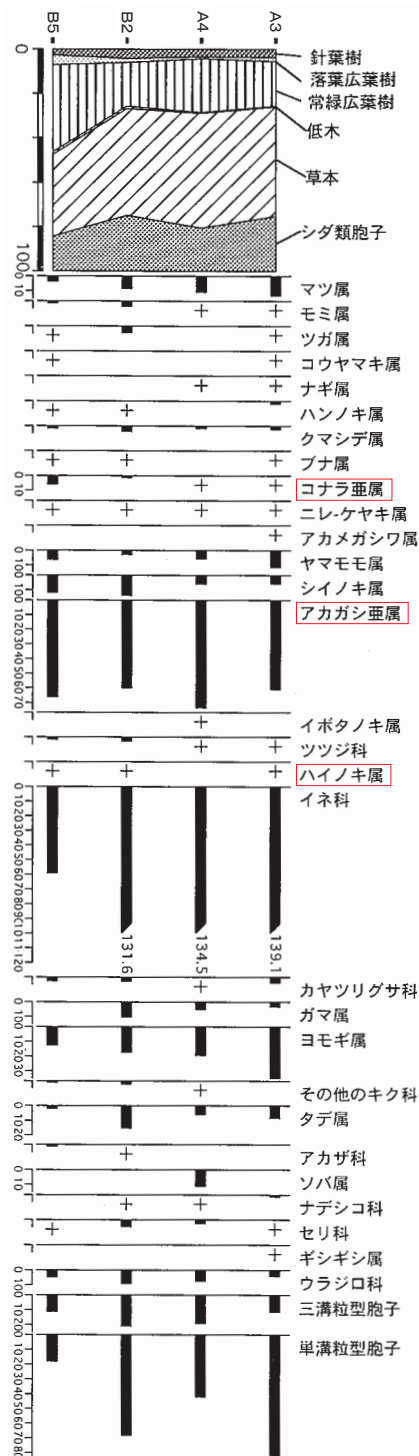


図85 花粉ダイアグラム (野井2004Fig.84を転載・加筆)



【註】

- 1) 「法量」「備考」の記載において、遺物番号433は434、434は436、435は449、436は435、437は433、438は437、439は451、440は450、449は439、450は438、451は440の内容となっているほか、法量の数値にも複数の誤りが見られる。
- 2) 報告書では「松明片」として掲載されている。
- 3) 小田富士雄ほか(1978)の170頁第26図の18・19、171頁第27図の32、176頁第32図の23、177頁第33図の23、178頁第34図番号不詳1点、179頁第35図の24が該当する。
- 4) 調査担当者は「河川」と呼称している(田畑2004)。

【文献】

- 池田善文ほか(1993)『長登銅山跡Ⅱ』美東町文化財調査報告書第5集, 美東町教育委員会(編), 美祢(山口)
- 小田富士雄ほか(1978)「第三編 周防鑄銭司の考古学的調査 第4章 出土遺物の調査 第一節 第1次調査出土の遺物」, 山口市教育委員会(編)『周防鑄銭司跡』, 山口
- 浦蓉子(2021)「奈良時代の燃えさしについて」, 深澤芳樹・浦蓉子(編)『古代の灯火—先史時代にいたる灯明具に関する研究』基盤研究(C)15K0300, 奈良
- 川島尚宗・横山成己(2021)「実習棟(動物病理解剖施設)新営その他工事に伴う予備発掘調査・本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成28年度』, 山口
- 田畑直彦(2004)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 田畑直彦(2017)「吉田構内総合研究棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XX』, 山口
- 西川正高・片山文雄(1977)『樹木 庭園樹・公園樹』, 株式会社ワールドグリーン編集部(編), 高松(香川)
- 野井英明(2004)「山口大学構内吉田遺跡における官衙遺構立地前後の植生変化」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 林弥栄(1969)『有用樹木図説(林木編)』, 誠文堂新光社, 東京
- 藤田慎一(2014)「付け木について」, 砺波市教育委員会・株式会社上智(編)『大丹保遺跡発掘調査報告書』, 砺波(富山)
- 藤田慎一(2019)「砺波市大丹保遺跡・増山遺跡出土の付け木について」, 『学術財研究』編集事務局(編)『学術財研究』第1集, 京都
- 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口
- 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成20年度—』, 山口
- 横山成己(2019)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成26年度—』, 山口
- 横山成己(2020)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事(プレハブ撤去)に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成27年度—』, 山口
- 吉田生物研究所(2010)「付篇 山口県吉田遺跡出土木製品の樹種調査結果」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口